

社説

米子市や境港市などの上水道は大山麓の地下水の恩恵を受けている。その良質な水を育むのが源流域の森林である。森は水の浄化や流量調整のほか、土砂を防いだり、CO₂を吸収する機能を併せ持つ。住民の生命と健康、産業振興の礎である森の役割を見つめ直し、森に親しみ、守る取り組みを鳥取県西部の官民が協力して推し進めたい。

上・下流域の交流
森林資源の活用や森を生かした地域産業の育成を目的に昨秋に発足したNPO法人「フォレストアカデミージャパン」(本部・日南町)は、下流域の住民に森の大切さを理解してもらう取り組みを進めている。21日には日野川源流の渓谷散策と源流の碑への

ウォーキングを行い、約30人が参加する予定だ。

同NPOは本年度事業としてこのほか、生きている木を

日野川源流の恵みを後世へ

西部9市町村一体で推進を

土台にした建物「ツリーハウス」講座や植林作業体験を実施する。催しの主眼に置くのが、上・下流域の交流である。

森のありがたさをつい忘れてがちになる市部から源流域を訪ね、森の尊さを体感し、時に林業に携わる人たちの話に耳を傾け、一緒に作業する子どもたちへの環境教育としても意義深い試みだ。

同NPOは今年4日、米子、境港市に対し、市民への事業のPRや、両市が日南町で育成している水源かん養林の有効活用などを要望した。これを受け、境港市は21日のウォーキングへの幹部職員の参加を決め、両市とも一連の事

として購入した。両市ともスギやヒノキなどを植樹しており、一定期間を経ての売却を視野に入れる。いずれの森も将来にわたって活用できる財産だ。

国は昨秋、森を育て、林業の活性化を図るため、公共建築物への木材利用を促進する法律を施行した。同NPOによると、樹齢25年程度、直径

活動も重要だろう。2002年に設立され、米子市と日野郡3町、民間企業約80社、個人約380人が加入している「日野川の源流と流域を守る会」はその一翼を担い、本年度も9～10月に日野川源流域での自然観察会などを行う。同NPOや同会の活動がそ野を広げ、より多くの住民の参加を得るには、県西部の自治体が一体となって動く姿勢が欠かせない。

業を広報することにした。まずは森の恵みに感謝する体験事業への参加の輪を広げていきたい。

米子市は1967年から南部、日野、日南の3町に水源かん養林を設ける事業に取り組み、同市水道局は99年に日南町の山林を取得、境港市も1981年に同町の山林を水源かん養のための「市民の森」

先月の正副管理者会議で、9市町村の広域連携指針となる「県西部広域市町村圏計画」を来年2月を目標に策定する方針を決めた。今後本格化する協議の中で、民間と一緒に日野川源流域の森を守り、上・下流域の交流を促進する事業を計画に盛り込んでいくか。圏域として森林の大切さを共有する推進力になるはずだ。